

---

# 夕凧の庭

愛田美月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夕風の庭

### 【Nコード】

N5277V

### 【作者名】

愛田美月

### 【あらすじ】

大栄帝国の東の村で、仮面呪術師の凧は、妖魔に生贄にされそうになった子どもと出会う。間髪妖魔から子どもを救ったが、子どもは妖魔に印を残されてしまった。印をつけられた子どもは、このままだと死んでしまう。都へ子どもを連れ帰った凧だが、姫神子の命により、その子どもと生活を共にし、妖魔から救うよう命ぜられる。凧が人嫌いを知っての命に、凧は苦々しい思いを感じるが・・・

\*和風小説企画参加作品\*

## プロローグ（前書き）

この作品は伊那さま主催『和風小説企画』参加作品です。

## プロローグ

二つの牛車が山中の道を通っていた。

大栄帝国の都大路を出た山の中。

旅の者が行き来するのに使われている街道である。

牛車に付けられた金具が太陽の光を反射する。たくさんの従者に守られた牛車には、それぞれ身分を示す旗が付けられていた。

この国を守る帝と、その妹にあたる姫神子の牛車だ。

都から山の離宮へ向かう途中であろつ。

行き会つた者達は、進む一行に土下座する。

行列はゆつくりと進んでいった。

その一行が動きを止めた。

先頭を歩く男の前に、えらく痩せこけ、薄汚れた子どもが立ちはだかつたのである。

「何をしておる、帝の御前なるぞ、控えろ」

立ちはだかつた子どもの前で、数人の大人達が腰に帯びた刀に手をかける。

「切りたきや切れ！ どうせ俺は捨てられたんだ。俺の家が貧しいのも、俺が売られたのも、みんな天帝が悪いんだ。文句言つて何が悪い」

眼光鋭く、子どもが刀を抜いた大人たちを睨み据えた。

大した度胸である。

周りで土下座する者たちの誰かが、喉を鳴らした。

近くにいる誰もが、子どもが殺される様を思い浮かべた。

帝の行く手を遮つた上に、帝への暴言の数々。不敬にも程がある。

「覚悟しろ」

一人の男が刀を振り上げた。

子どもはその姿をじつと見つめた。

刀の先端が、太陽の光をきらりと反射させた。  
自らに振り下ろされる刀が、子どもの目には、  
妙にゆっくりと映  
った。

## 第一章 生贄

ほんの好奇心であつた。

子どもらは、村の奥にある森を歩いていた。

大人達から、子どもだけでは決して入ってはならぬと言われている森の中に、入ってしまったのだ。

いいかい、あの森の奥には、沼があつてな。

沼にはその昔、それはそれは怖い妖魔が住みついたのよ。

その妖魔は、沼に近づく村人を、たくさん、たくさん喰らうた。それはもう、たくさんな。

村のお婆の昔語りを、子どもらは思い出していた。

その妖魔はな、悪さをしすぎた。だから、姫神子さまと仮面呪術師様に封印されてしまったのよ。

どこに封印されたのかつて？

その、沼にさ。

沼には今も妖魔が住みついて、封印がとけるのを今か今かと待っている。

だから決して、沼に入っちゃなんねえ。

結界がとけてしまうからな。

いいかおめえら。

沼に近づいちゃなんねえ。結界をといちゃなんねえだ。それが、こん村の掟よ。

鬱蒼とした森の中、葉擦れの音が不気味な響きを持って子どもらの耳を打つ。

森の中の道なき道を、子どもらは進んだ。

お婆の言っていた沼を目指している。

誰が言い出したか、肝試しと称して。

さすがに夜に家を抜け出すことは出来ず、昼間に決行したが、森の中は薄暗く、充分に子どもらの恐怖心を煽った。

木洩れ日が少なく、薄暗い森の中はどこか湿り気を帯びていて、気持ちが悪い。

「ねえ、もう帰ろうよ」

男の子が一人、泣きごとを言った。

「な、何を言うか。おまえ怖いのか」

一人がその子に向かって虚勢を張る。

「こ、怖くなんかないやい」

そう言って、泣きごとを漏らした子どもは、引き返す機会を失い、他の子らと共に森へ分け入る。

しばらく行くと、木々の途切れた場所へでた。

遮るものが無くなった太陽が、その場所を明るく照らしている。

子どもの一人が、開けたその場所に小さな沼を見つけた。

太陽の光を受け、水面がきらきらと輝いている。

沼には美しい紅色の花が、いくつも浮いていた。

絶景に、今までの怖さを忘れ、子どもらは歓声を上げ、沼に近づいた。

忘れてしまっていたのだ。

決して沼に近づいてはならぬ、決して沼に入ってはならぬという、

村の掟を。

その後。

子どもらは、二度と村へ帰ることはなかった。

夜半過ぎ。村長の家むらおやに、村の男たちが集まっていた。

昼間遊びに出掛けた子どもら七人が、夜も更けたというのに、いまだ帰らぬからであった。

「一体、どこへ消えたのか」

男の一人が口火を切った。子どもらの行きそうな場所を散々捜しまわり、見つからなかった後なだけに、その声はどこか疲れをおびていた。

「村長。これだけ捜して、おらなんだ。まさかとは思うが、沼へ言っただんじゃなかるうか」

初老の男に話を向けられた村長は、黒く日焼けした厳めしい顔を、苦渋に滲ませた。いなくなった子の中に、村長の息子もいたのである。

「今、沼あ見に行かせている」

村長が告げた。辺りがざわつく。

まさか、沼に。

沼には決して入ってはならぬ。

それが村の掟。

もし、入ったりすれば……

「村長！」

ざわめきの中にあつた部屋の戸が、勢いよく開けられた。

沼を見に行った男の一人が、部屋へ駆けこんできたのである。

「どうした、喜兵衛きへい」

喜兵衛と呼ばれた男は、青ざめた顔で、ゆっくりと集まった男達

を見回した。

「沼が、沼が……」

その後が続かぬ。

業を煮やした村長が、叩きつけるように声を上げた。

「沼がどうした！」

喜兵衛は唾を飲み込むと、言った。

「沼が、真っ赤に染まっとる。それから、太助<sup>たすけ</sup>が……」

言つて、喜兵衛は一度部屋の外へ出ると、布に包まれた何かを持つて部屋へ戻つてきた。

その布を捲る喜兵衛の腕が震えている。

捲られた布の中身を見た男たちは、奇声を上げ、あるいは腰を抜かした。

布に包まれていたのは、誰がどう見ても、人の腕であつた。

一体どうしたのだろう。

上の方が騒がしい。

村長の家の地下にある一室に、幼子が一人座っていた。

生まれてこの方、ほとんど外へ出たことのない幼子は、そんなことを考えて、天井を見上げた。

窓もない部屋には、母の使っていたという鏡と、着物の入った行李が置いてある。

部屋にあるものはそれくらいであつた。

ろっそくの明かり一つない部屋の隅で、幼子は膝を抱え、上の喧騒を聞いていた。

どこか恐ろしい感じがする。

小さな胸にそんな思いが去来する。

何か恐ろしいことが起こっているような、そんな予感がするのだ。

カタンつと、音が聞こえた。地上へと通ずる階段を塞ぐ戸が、開かれた音だと知れた。

聞き慣れた音だ。

誰かが灯りと共に階段を下りてくる。

「村長がお呼びだよ。出ておいで」

村長に仕える女の声だった。幼子の面倒を見てくれていた婆おばが死んだ後、現れるようになった小間使いだ。たびたび、幼子に食事を運んでくるこの女を、幼子は恐れていた。言うことを聞かぬと打ぶたれるからである。

幼子は素直に従った。しばらくぶりに地下の部屋を出て、小間使いの後に続く。

村長のいる部屋の前についた。小間使いは、ゆっくりと部屋の戸をあけ、土下座する。

「連れてまいりました」

久方ぶりに見る村長は、小間使いに深く頷き返し、女の上に立っていた幼子を手招いた。

幼子は一定の距離まで近づくと、そこで正座する。

「お久しぶりでございます。父様とこさま」

幼子の声が部屋に静かに通った。

幼子に村長は答える様子を見せず、少し視線をずらしながら、言っ

た。「忌み子いみこであるおまえにも、ようやく外へ出る機会ができたぞ」

幼子は目を見開いた。

外へ出ると聞き、驚いたからである。

忌み子。

母を殺して生まれてきた子どもを、この地方ではそう呼ぶ。

忌み子として生まれてきた子どもは元来、亡くなった母御と一緒に墓に埋められるのが習わしだ。しかし、死ぬ間際。幼子の母は、それを認めなかった。村長は仕方なく家の地下へと息子を隠し、育

ててきたのである。

忌み子は妖術を持つと言われる。

そのため、幼子は村外へ秘匿されてきた存在だった。そんな自分を外へ出すなど、あり得るはずがない。

それくらいのこととは、幼子にも分かった。

「何か、あったのですか」

幼子は静かな声で問うた。

自分を外へ出さなければならぬ何かがあったとしか思えない。

「水妖の話は知っておるか」

村長の言葉に、子どもは頷く。

「その妖魔の結界が解けたのだ」

幼子は息を飲んだ。今よりもずっと小さき頃、婆に聞いた昔語り  
が、幼子の頭の中に蘇る。

「人が、喰われたのですね」

「おまえは、年の割に聡いな。忌み子でさえなければ……」

そこまで言って、村長は堅く唇を引き結んだ。

その後、深く息を吐く。

一度目を瞑った後、幼子をしっかりと見据えた。

「おまえに村長として命ずる。妖魔の怒りを鎮めるため、生贄となれ」

幼子は息を飲んだ。小さな手を胸にあて、大きく息を吸い込んだ。

「はい。父様」

幼子はゆっくりと、父に頭を下げた。

## 第二章 仮面呪術師

夜遅く、森の中を歩く影があつた。

影は二つ。

その影の一つから声が上がった。

「おい、凧よ。本当に寄り道するつもりか」

「くどい」

凧と呼ばれたもう一つの影が答えた。

月を覆っていた雲が流れ、二人の人影を照らし出す。

二人の人影は、黒い外套を纏い、顔半分に仮面をつけた異様な出で立ちをしていた。

この辺りの村では、まず見ぬ格好である。

都へ行けば、時折見かけるその姿。この者達是这样と呼ばれていた。仮面呪術師と。

この大栄帝国を治める天帝。

この大陸に蔓延る妖魔を国に入らぬよう防ぐ結界をはり、国に神託を告げるのが、天帝の妹でもある姫神子。

その天帝と姫神子の下で呪術を使う者たちを、仮面呪術師と呼ぶ呼び名の由来は、名の通りつけている仮面からである。

呪術師の仮面は、使う能力によって、模様として描かれる線の色が違ってくる。呪術師の仮面は、一つとして同じ物はないと言われている。

その仮面呪術師がなぜ、東辺境の村近くにいるのかといえば、つい先ほどまで結界の綻びがないかを探っていたからであった。

最近、東の結界の一部が綻び始めていると、姫神子の託宣があつ

た。そのため、彼ら二人は東に派遣されたのである。

二人は朝の早い内に術力を使い、都から東野の村へたどり着いた。常人ならば、五日はかかる道のりである。

結界の綻びを見つけ、結界強化の儀式を執り行い、終わったのは夜半過ぎ。

都へ帰る支度をしている際。不意に、仮面呪術師の一人、凧が妖魔の気配を感じとり、都への帰りを遅らせると言い出したのである。

「なあ、凧<sup>なぎ</sup>。寄り道なんぞしたら、また、姫神子様にお小言くらうぜ」

大きな図体に似合わぬ気弱な台詞を吐いた術師に、凧は冷たく言い放った。

「ならば剛毅<sup>きうぎ</sup>。おまえ一人、帰ればよい」  
「凧」

剛毅と呼ばれた男は凧よりも随分と背が高い。並んで歩くと、凧は剛毅の肩に頭が届くかどうかといったところである。立派な体格をしている剛毅に対し、凧は酷く細く見えた。剛毅の体躯が立派すぎるせいもあるのだろうか。

「気にならないか？ この妖気」

森の中を歩いて行くうちに、瘴気が濃くなったように思われた。

凧は仮面で覆われていない口元を、我知らず手で隠した。

「まあ、確かにな」

頭にぶつかりそうな気の枝をかがんで避けながら、剛毅が同意した。

その時である。

突如、森の奥から幾数もの悲鳴が聞こえた。

ほとんどが男の声だと知れた。

二人は走った。

常人にはおよそだせぬ速さで疾走し、凧と剛毅は木々の切れ間の開けた場所へと飛び出した。

その場の光景は凄惨たるものであった。

沼がある。

沼の周りに、いくつもの死体が転がっていた。

夜目に慣れた目に映ったのは、沼からいくつも這いだす触手のようなもの。

その触手のひとつが、まだ生きている人間を、沼の中に引きずり込んだ。

一瞬驚きに声を失った二人は、沼の前に白い神輿みこしがあることに気付いた。

地に散乱したいくつもの死体は、この神輿を担いできた者たちだろうか。

そんなことを考えていると、何かがこちらに転がってきた。  
頭だ。

人間の頭部だけが転がってくる。

それは凧の足元近くにある木の根にぶつかり、止まった。

その頭部がついていたであろう身体は、触手のようなものからめとられ、沼に引きずり込まれていった。

よくよく見ると、沼に咲く蓮はすの間にも、いくつか、人体の一部と思われるものが浮いていた。

「一体何がどうなつてやがる」

舌打ちをして、剛毅が走り出した。

凧も我に返り、剛毅のあとを追う。

剛毅は、手近に転がっていたまだ息のある者を、沼から遠ざける

べく担ぎあげた。一人、二人、三人と。恐るべき剛腕である。

凧は、白い神輿が気になった。けが人を運ぶのは剛毅にまかせ、神輿に目を向けた。

まだ、あの中に人の気配があるのを感じとったのである。

しかし、神輿に近づくは、沼に近づくと同意。

一瞬の迷いを振り払い、凧は両の手の平を打ちつけ、その手に息を吹きかける。

ゆっくりと手を左右に広げた。

左の手の平から出てきた刀を抜きとる。

いくつも襲いくる触手を一閃のもとに切り捨てながら、凧は白い神輿に近づいていく。切っても切っても、触手はまたもとの形態へ戻ってしまう。

きりが無い。

蠢く触手の一つが、神輿にぶつかった。

中から、白く小さな人影が転び出る。

まずい。

凧は跳躍した。

小さな人影は、神輿の中から転び出て、ゆっくりと半身を起した。辺りの余りの様子に驚愕しているのだろう。身動き一つ取れないでいる。

触手が小さな人影に迫っていく。

『贄だ。生贄だ』

不意に、凧の頭に声が響いた。  
妖魔の声か。

凧は、子どもの前に降り立つと、子どもを抱え再び跳躍しようとした。

その足に、池の中から飛び出してきた触手が絡まる。  
子どもを庇うようにして、凧は地に強く背をぶつけた。  
息が詰まる。

ふと見上げれば、触手の先端がまるで槍のようにとがり、凧と子どもを貫こうとしていた。

慌てて身を擦った凧は、不意に脇腹が熱くなるのを感じる。

次いで痛みが襲う。

脇腹をやられたか。

凧は足に絡みついた触手を刀で切り離すと、素早く立ちあがった。  
脇腹に激痛が走り、顔を顰める。

「凧！」

剛毅がこちらへ駆け寄ってきた。

「何だ。こいつは」

「水妖だろう。たぶん」

「に、してもひでえ有様だ」

剛毅は辺りに響くような大声で、術の詠唱を始めた。

詠唱を終え、懷から札を取り出すと同時に叫ぶ。

「炎華<sup>えんか</sup>！」

投げつけた札が炎の塊となって、凧達に向かって来た触手にぶつかる。

触手が燃える焦げた臭いが辺りに広がった。

妖魔の叫びが辺りを震わせる。

『許さん、許さんぞ、人間め。贅を、贅をよこせ』

いくつもある触手が一齐に凧に向かった。

凧は向かってくる触手を刀で払い除けながら、小さな子供を抱え直し、背後へ跳躍する。

だが、触手の内の一つが、子どもの小さな腕に絡みついた。

凧はその触手を刀で切り落とす。

凧に攻撃が集中していた間に、呪文の詠唱を終えた剛毅が声を張り上げ、札を沼へ向かって放り投げた。

数枚の札が空を裂き、沼へ向かった。札は円を描くように一周すると、宙へとどまり、沼を囲う。

「封縛<sup>ふうばく</sup>！」

妖魔の呻き苦しむ声が森を揺らす。

しばらくして、辺りは静寂に包まれた。

「終わったか？」

剛毅の声が凧の耳を打った。

凧は目を閉じ、妖魔の気配を探り、嘆息する。

「逃げられたようだな」

言いながら凧は、自分が抱えている子どもに視線を落とした。

泣きも叫びもしないと思っていれば、気を失っていたらしい。

とても軽い、まだ小さな子どもだった。白装束を着ているということ、生贄にされようとしていたのか。

切り捨てたはずの触手が、幼子の腕に残っていることに気付き、凧は腹立たしげに、それを掴んで放り捨てた。

### 第三章 痣

凧と剛毅は生き残った村人を連れ、村へ入った。

村長に事情を説明すると、怪我人は村長の家へ集められることになった。

薬術の心得のある剛毅と凧が、あらかた村人たちの治療を終えた頃。

剛毅が凧の肩を掴んだ。

「凧、腹あ見せろ、血が滲んでいるぞ」

凧は肩を掴んだ剛毅の手を、反射的に振り払った。

「触るな」

叩きつけるような言葉。

凧は仮面の下から覗く剛毅の口元が苦笑に歪んだのを見て、剛毅から視線を外した。

「すまん。傷の手当てぐらい自分で出来る」

「そうかい。これ薬だ」

そう言つと、剛毅は薬を手渡し、凧から離れて行つた。

凧は嘆息し、小袖を脱ぐと、脇腹の傷の手当てを始めた。縫うほどの傷ではなさそうだ。

そう見てとり、凧は剛毅に渡された薬を傷口に塗り込んだ。

激痛が走るが、妖魔に付けられた傷を放っておけば、大した傷でなくとも壊死する恐れがある。

凧は、痛みが去るのをしばらく動かずに待ち、傷口を覆うように布を当て、その上から包帯を巻いた。

凧が傷の手当てをしている間、剛毅は生き残った者達に話しかけて回っている様だった。

凧は傷の手当てを済ませると、剛毅に声をかけた。

怪我人を村の女たちにまかせ、地下の別室へと運ばれていった子

どもを見舞うことにしたのである。

暗い地下の部屋へ下りると、二人は子どものいる寢床の横に座り込む。ろうそくの明かりで、壁にできた大きな影が揺らめいた。

子どもは白装束のまま寝かされている。顔に、血の気がない。

二人が近づいても、気づいた様子もなく、深い眠りにについているようであった。

凧はそつと、子どもの腕をとった、細く華奢なその腕は、少しでも力を入れると折れてしまいそうだ。

凧は子どもの腕をじつと見つめた。

「やはり、印いんがついているな」

「なんてこつた」

凧の言葉に、剛毅が頭を抱えた。仮面で見えないが、かなりの顰め面をしていることだろう。

凧の見下ろす子どもの腕に、黒い痣のようなものがある。ちょうど、妖魔の触手が触れた辺りであった。

その痣は、自由に動けぬ妖魔が、獲物につける印しるしである。印をつけられた者は、力を吸われ、妖魔に抗えなくなったところで、おびき寄せられ喰われるのだ。

印をつけられたということは、この子は、妖魔が執着するに値する何かを持っているのかもしれない。

二人がそう考えた時だった。

部屋の戸が開いた。

二人して戸の方へ視線を向けると、先ほど村長と名乗った男がこちらに目を向けていた。

「失礼、仮面呪術師殿」

そう言って、男は剛毅の横に座り、寝入っている子どもを見下ろした。

「生きて帰って来るとはな」

村長の呟きが聞こえたのだろう。

剛毅が村長に顔を向けた。

「こんな小さな子を、なぜ生贄なんぞにしようとした」

怒りを含んだ声であった。

「剛毅」

窘めるように名を呼んだが、剛毅の気性では口をつぐむことはせぬだろうと、凧は予想した。

「生贄だけで、済むとでも思ったか？ 妖魔はそんな簡単なものじゃない」

村長は静に剛毅の言葉に耳を傾けていたが、息子を見下ろしていた目を上げ、剛毅に視線を据えた。

「妖魔は、この子を贄にと所望したのだ。元来、生きてはおらぬはずだった命。生贄にして村が助かるのなら……」

「生きてはおらぬはずの命とは、どういうことだ」

凧は思わず口を挟んでいた。村長は凧に視線を移した。

「この子は母殺しの子。この子の母はこの子を産んで死んだ。この子は罪深き忌み子なのだ。忌み子は妖術を持つ。それゆえ、妖魔もこの子を所望したのだろう」

仮面で隠れていない凧の口元が引き結ばれた。強く歯を食いしばったのだ。

東地方に、そういう風習があることは知っていた。

都に住む凧にとっては、理解しがたい風習だ。

だが、この地に住まうものには当たり前のことなのだろう。

母を殺して生まれてきた子は妖術を得る。

基本。妖術とは、凧や剛毅のように術力を使うことをさすが、別に、その人の持つ特別な力で、本人の意思に関係なく、他人に危害を加える力という意味もある。村長が言った妖術は、後者の意だろう。

「沼は封じた」

ぶつきらばうに、剛毅が言った。村長の顔に一瞬安堵の表情があらわれた。

「だが、妖魔を倒したわけじゃない。奴は逃げた。この子に印を残して」

村長は失望の色を隠しもせず、剛毅に問うた。

「この村はどうなるのです」

「村というよりは、この子だろう。危険なのは」

村長は意味を理解できぬような様子だった。

凧は、細く白い子どもの腕をとり、腕に浮き出た黒い痣を村長に見せた。

「妖魔の狙いはどうやらこの子一人。他の者は、力をつけるための、奴の腹の足し、というところだろう。この印をつけられた者は、多かれ少なかれ命を吸われ、死に至る」

「さようか」

村長の顔から表情が消えた。

「では、これを村から出せば、村は助かるということだな」

その言葉に、剛毅が怒りをあらわにした。

「何を言うかつ。たとえ忌み子であっても、お主の子である。見捨てる気か」

半分腰を浮かし怒鳴りつけた剛毅に、村長は一瞬ひるんだ様子を見せた。だが、村長はすぐに居住まいをただし、剛毅と凧の正面に身を向けた。

「私は村長。村のことを一番に考えねばならぬ。もうすでに大きな犠牲が出ているのだ。これ以上、犠牲をだすわけにはいかぬ」

「だが……」

なおも言い募ろうとした剛毅の肩を、凧は掴んだ。剛毅が凧を振り返る。

凧は、剛毅ではなく、村長に視線を定めた。

「なら、この子を都へ連れて行っても、構わぬな」

村長が驚いたように目を見開く。

「私たちが連れて行くと申しているのだ。どうせ、元から無かった命なのであろう。明日、この子を連れて都へ戻る」

「だが」

言い淀んだ村長に、凧は強い口調で続けた。

「出る前に、もう一度沼に結界をはって行く。二度とあの妖魔が沼に現れぬようにな。それでよからう」

村長は、一度子どもに視線を向けた。しばしの後、表情を消した村長は、二人の仮面呪術師にゆっくりと頭を下げた。

## 第四章 都へ

翌日。帰京した凧と剛毅はその足で、姫神子のおわす神殿へ向かった。

昨日の報告と、成り行きで引き取った子をどうするか、姫神子の沙汰を申し受けるためである。

簀すしへ座り、姫神子が来るのを、土下座して待っていた二人は、御簾の向こうに姫神子の気配を感じ取った。

衣擦れの音を耳にし、姫神子が上座に腰かけたことを知る。面をあげよと命を受け、二人は身を起こした。

「御苦労でしたね。二人とも」

高く澄んだ声が二人を労った。

「子を、連れ帰ったようですね。妖魔の印を持つ子を」

何も言う前から、姫神子は分かっていたようであった。

それとも、遠見てんみの能力を使って知り得たのか。

「凧よ」

「はっ」

凧が、目を伏せると御簾の向こうで、姫神子が言った。

「おまえが引き取りなさい」

「は？」

思わず素の声が漏れてしまった。

隣で剛毅が、仮面に覆われていない口元を震わせている。

いつも堅い表情を崩さぬ凧の、いつもと違う反応が面白かったのであろう。笑いをこらえているに違いなかった。

「おまえが連れて来たのでしょうか？ その子のことはおまえにまかせます。残念ながら、あの子の印はその妖魔を倒さねば消えぬもの。その妖魔を倒すまで、おまえがその子の面倒を見なさい」

凧は、言葉が出てこなかった。

まさか、そんな展開になるとは思っていなかったからだ。

正直、凧は子どもが苦手だった。子どもだけではない。人づきあいが下手なのである。

七つの時に、口減らして親に捨てられて以来。余り人と関わることなく生きてきた自分に、子どもの世話など出来るはずもなかった。「しかし」

凧が、恐る恐る反論しようとした時、姫神子は間髪いれずにこう言った。

「二言はありません。分かりましたね、凧。……私たちにあのような不敬を働いたそなたを拾ったあと、私は、ちゃんとおまえが仮面呪術師として育つまで面倒をみましたよ。あのような不敬を働かれたのは、後にも先にもおまえだけだというのにねえ。私は何て慈悲深いのでしょうか」

凧は、反論する言葉を封じられた。七つの頃親に捨てられた凧に目をとめ、拾ってくれたのが誰であろう、ここにおわす姫神子と、この国の帝であることは事実だ。

それにしても、今ここでそれを言うか。

苦々しい思いが口元にあらわれた。

「おまえが、連れて来たのでしょうか、凧。おまえは、その子と寝食を共にすること。町の中に住まうは周りに危害を及ぼす危険性があります。人里離れた場所に家も用意しておきました。そこでその子を守り、暮らしなさい。これは命令ですよ」

姫神子の声が、先ほどからどこか楽しげなのは気のせいだろうか。否、気のせいではないだろう。凧の反応を見て面白がっている。

凧は昨日腹に受けた傷が疼く気がして、顔を顰めた。

自分もしかして、とんでもない物を背負い込んでしまったのではないか。

そう思っても後の祭りである。

凧は腹を括った。

「御意」

凧は深く頭を下げると、姫神子に気づかれぬよう溜息をついたの

だった。

白い神輿の中。子どもはいくつもの悲鳴を聞いた。

白い布に覆われた神輿の布が、悲鳴と共に、一部赤く染まった。外で何が起きているのだろう。

子どもは恐ろしくて、恐ろしくて。

外へ出ることができなかった。

ただ、ただ、震えていた。

そして、神輿が倒れた拍子に、神輿から転び出て見たものは……。

子どもは悲鳴を上げて、目を開いた。

眠っていたのだろうか。身体に上掛けがかけられており、それを強く握り締めていた。胸が大きな音を立てている。汗をびっしょりとかいていた。

「大丈夫か」

声が聞こえて、子どもはゆっくりと首をめぐらせた。

そして、また悲鳴を上げる。

「うわぁ」

半身を起し、壁際まで手足を使って後退した。上掛けを握ったままである。

壁に背を預けて、子どもは辺りを見回した。

見慣れぬ部屋だった。

一体ここはどこで、この人たちは誰なのだろう。

生贄になったはずなのに。

なぜ、こんな所にいるのか。

「失礼な奴だ。助けてやったのに」

立派な体軀をした、奇妙な格好の者がそう言って、ガハハと大きな笑い声をたてた。

その大声に思わず身体が震える。

「馬鹿、怯えているだろうが。それにこいつを助けたのは俺だ」

大柄な男と同じような仮面をつけた人物がそう言って、そつと仮面をはずした。

子どもはその顔を見て、放心する。

今までに見たことのないくらい、綺麗な顔立ちをしていたからだ。短くまつすぐな黒髪。小さな顔。大きな目を覆う睫は長く、鼻梁は綺麗な形を描いている。大きすぎも小さすぎもしない唇は艶めかしい曲線を描いていた。

「お姉さん？」

しばらく見とれた後、仮面を取った人物に尋ねた。それを聞いてか、まだ仮面をつけたままの大柄な男が、急に笑い出した。

笑っている意味は分からないが、怖い人たちではないらしい。少し安心して、子どもは首を傾げた。

「俺は凧。男だ。声を聞けば分かるだろう。ちなみにこの大きな男は剛毅という」

凧はまだ笑っている剛毅の足を踏みつけて、黙らせた。

「でも、綺麗な顔をしているよ」

子どもが言うと、せっかく静になった剛毅が発作を起こしたように笑いだす。

凧は渋い顔で笑っている剛毅を無視すると、子どもの前で膝をついた。

「行くぞ」

そう言って、子どもを抱き上げる。

急に抱きあげられた子どもは、驚いて凧の首に腕をまわした。

「どこへ行くの？」

「これからおまえと俺が住む家にだ」

「ぼくは、お兄さんと住むの？ 地下のお部屋は？」  
また尋ねると、凧は面倒臭そうに、後で話すと話を切り上げた。

山の中腹にその家はあった。

二人で住むにはちょうどよい大きさの家だ。  
少し古くはあるが、使えない程度ではない。

家は簡素な板垣で囲まれている。

その板垣が、結界の役割を果たしていることは、呪術師の凧にはすぐに知れた。

板垣の木戸を開き、ずっと抱き上げていた子どもを庭に下ろした。  
すると、子どもは急に、凧の袴を掴む。つい、引き剥がしそうになった手を止めて、凧は尋ねた。

「どうした」

子どもは、より一層凧に身を寄せて、凧を振り仰いだ。

「ぼく、お外に出ていていいの？」

先ほどからずっと外を歩いて来たのに何を言いだすのか。そう思ったが、不意に彼の言わんとすることを理解した。

忌み子として育てられてきたこの子どもは、ずっと地下の部屋に  
いることを命ぜられてきたのだ。

「この庭ならな」

「叩かれないの？」

「外に出ると叩かれるのか？」

尋ね返すと、子どもは小さく頷いた。凧は子どもを哀れに思った。  
そのことに少し驚く。思いを隠すように、凧は口を開く。

「この庭の中ならいい。この板垣の外には決して出るなよ。おまえのためだ」

子どもは小さく頷いた。凧が家に向かって歩き出すと、子どもは  
凧の袴を掴んだままついてきた。

## 第五章 生活

都の空は今日も穏やかに晴れていた。宮中の様子もいつも通り、穏やかな空気に包まれている。

そんな中、とある場所では、宮中の雰囲気似合わぬ会話が交わされていた。

「あの妖魔、追ってくると思うか？」

「印をつけたのだからな」

仮面呪術師が集う詰所。そこでは、数名の仮面呪術師がそれぞれの作業をこなしている。詰所にいる全員が一樣に仮面をつけているその光景は、一種異様な雰囲気醸し出していた。

仮面一つ一つには、それぞれ模様がついている。線で描かれた模様は、五色の色があり、色によって、その者の使う呪術の種類が分かるようになっていた。

複数の色で模様付けされた仮面を身につけている者は、それだけ多くの呪術を操れるということである。

凧と、剛毅の面には、五色全ての色が入っていた。

このように全ての色の線が描かれた仮面を持つ者は、姫神子に仕える仮面呪術師の中でもごく僅かしかない。

「水妖だから、水を伝って移動してくるか……もしくは、印を使つてなんらかの接触をはかってくるだろうな」

「それにしても、何だって、あの子どもに執着するのかねえ。あの妖魔は」

剛毅が頭を掻きながら苦々しげに言葉を口にする。

「少なくとも、忌み子として育てられたというのが影響しているのだろうな。人の暗い心根を一身に受けて育ったのだ。妖魔には格好の餌だろうよ」

淡々と凧が語る言葉を聞いて、剛毅は仮面に覆われていない口元を歪めた。

「嫌になるな」

そう吐き捨て、思い出したように話を変えた。

「そう言えば、凧。おまえあの子と上手くいつているのか。子どもが子どもの世話しているのかと思うと、面白くてしかたねえ」

言いながら、くくくと剛毅が笑った。

「失礼な奴だな。誰が子どもだ」

「おまえだよ」

間髪いれずに返されて、凧は気分を害した。

「俺はもう十八だぞ。そりゃ、六つも年上のおまえに比べれば子どもかもしれんが」

「拗ねるな、拗ねるな。今度、遊びに行つてやるよ」

剛毅は、凧の頭に手をやって軽く二度ほど叩く。それを払いのけて、凧は立ちあがった。

公務の終わる時刻になったのだ。

「いらん。来るな。絶対に」

凧は剛毅に背を向けるとさっさと詰所を後にした。その背に、剛毅の笑い声を聞きながら。

夕闇が辺りを覆う頃。凧は子どもと暮らす家の扉を開けた。

「おかえりなさい」

するとすかさず子どもが立ちあがって、こちらへ近づいてくる。

まだ一日寝食を共にしただけなので、どこかぎこちない雰囲気が出ている。凧を締め付けている。

土間に入り、上がり框に腰かけ、草履を脱ぐ。

「変わったことはなかったか」

草履を脱ぎながら問うと、子どもは頷いた。

「うん。それと、これ。ちゃんと、剥がさなかったよ」

そう言って、子どもは細く小さな手を上げて凧に見せた。

妖魔の印が付いた腕に、痣を覆い隠すように白い紙が巻きつけられている。姫神子から賜ったお札だ。これを巻きつけていれば、印の力を弱めることができるという。

凧はそうかと頷いて、子どもの頭を撫でようと手を伸ばした。なんとなく、そうした方が良いと思ったからだ。

すると、子どもは怯えたように身をすくませ、頭を庇うように両の手を置いた。その行動の意を察し、凧は溜息をついた。

「大丈夫だ。殴ったりしない」

凧はそつと子どもの頭に手を置いて、撫でてやる。

子どもはほつと胸をなでおろし、凧を見上げて笑顔を作った。

大きな目が印象的の可愛らしい顔立ちをした子どもだ。

こんなに小さいのに、殴られるのが当たり前前の生活をしてきたのだな。

凧はそう思っ、もう一度子どもの頭を撫でた。

「飯にするか」

その言葉に、子どもは嬉しそうな顔を見せた。

火にかけた鍋から雑炊を掬い碗に入れると、囲炉裏端に座った子どもに手渡した。

子どもはそつとそれを受け取り、子どもの手には大きすぎる箸でそれを口にした。

「あつ、つい」

少し目を離れたすきに、雑炊を冷ましもせずそのまま口にしたらしい。口から出した舌が真っ赤になっている。

「そのまま食うからだ。熱いに決まっているだろう」

凧は微かに苦笑して、茶碗に水を汲んで飲ませてやった。子ども

が水を飲んでいる間に、自分の椀に入れた雑炊を床に置くと、子ども隣の座った。

子どもの手から椀を取り上げると、雑炊を箸ですくい、ふうふうと数回息を吹きかけて、嫌がる子どもの口に入れた。

子どもは驚いたように目を見開いて、口をもぐもぐと動かしながら風を見た。

「あ、そんなに熱くない。でもちよつと痛いや」

「舌を火傷したのだろう。しばらく痛いだろうがそのうち治る。いか、熱い物はこつやつて、冷ましながら食うんだ」

もう一度実践して見せてから、子どもに椀を返す。

「僕ね、今までこんなにあつたかいご飯食べたことなかったの。いつもね、ご飯は冷たいの。熱いと煙がでるんだね」

湯気の事を言っているのか。そんなことも知らずに育ってきたのかと思う。

親に捨てられた過去を持つ風自身よりも、この子の方がよっぽど酷い扱いを受けてきたのだろうか。

風の綺麗と評判の顔に、一瞬、憂いの表情が浮かんだ。

「そうか……あつたかい方が美味いだろう」

「うん。美味しい」

風の問いに元気に返事をして、慣れぬ手つきで子どもは箸を使った。風に教えてもらった通り息を吹きかけながら、雑炊を食べ始める。

熱心に風の作った雑炊を食べる子どもを見ながら、風は自分の椀を手にとり、一緒に食事を始めたのだった。

## 第六章 訪問者

凧が子どもと暮らし始めて三日目となった。

その日、参内はなく、凧は子どもと共に部屋の掃除で午前中を潰した。

疲れて子どもが寝入ってしまったてすぐのことであった。家の木戸が大きな音で叩かれた。

「おーい。凧。いるか」

戸を叩く音と共に、聞き慣れた声が凧の耳に届く。

「開いている。入ってこい」

凧も声を張り上げて、外にいるはずの剛毅に答えた。結界を超えて木戸を叩いたのだ、妖魔の類ではない。

「邪魔するぜ」

言いながら、木戸を開いた剛毅の目に、座った凧と、その横で寝息を立てている子どもの姿が映った。

「おっと、昼寝していたか」

「ああ。疲れているのか、ちょっとやさつとじゃ、起きやしない」

凧が呆れたように言って、自分の横で寝息を立てている子どもを見下ろした。

「そうやっていると、親子みたいだな」

剛毅が草履を脱いで部屋に上がってきた。

「俺にこんな大きな子はおらん」

「知っている」

にっと笑った剛毅の顔に、今日は面が付けられていない。

大きな身体に似合いの精悍な顔立ちであった。

「にしても凧よ、せっかく土産持参で来てやったのだから、戸くらい開けてくれてもよいだろうに」

凧はふっと息を吐きだすと、ある部分を指さした。それを見た剛毅が笑い顔になる。

「ははは。なるほど。掴まれていて動けんかったか」

「そういうことだ」

子どもは、凧の袖をしっかりと握りしめて眠っていたのである。これでは身動きがとれない。

「おまえでも、そう言う優しい気遣いを見せることがあるのだなあ。」

しみじみとした剛毅の言葉に、凧は眉を寄せる。

「失礼な奴だな。まったく。まあ、おまえに向ける優しさを持ち合わせていないのは確かだが」

「お、何気に酷いやつだな、おまえ。色々世話してやった恩を忘れたか」

言われて、凧は剛毅から顔を背けた。

「忘れた。そんな昔のこと。今じゃ俺が世話をしている」

「何を。それこそ失礼な話だ」

剛毅は豪快に笑い声をあげ、ふと気付いたようにその笑いを止めた。

じつと、子どもを見つめているところを見ると、眠っている子どもが起きることを心配したのだろう。

だが、子どもは起きる気配をみせない。

「印の影響か、疲れやすくなっているようだな。もともと、体力もなさそうだし」

凧の言葉に、剛毅が頷いた。

「そっぴや、凧。この子、名はなんと言っのだ」

聞かれて、凧は目を見開いた。

その反応に驚いた剛毅が、こちらも目を剥いて声を上げる。

「おまえ、聞いてないのか」

長年の付き合いである。凧が目を見開いた理由をしっかりと言いつつ、当然だ。

「必要性を感じなかったものでな」

「普通はまず名を聞くのが礼儀だぞ」

剛毅はこれ見よがしに額に手を当てて、大きく溜息をついたのだ。  
った。

子どもは真っ白な世界にいた。

その世界では、水面だけがはっきりと見えた。

子どもは水辺に立っていた。

ここはどこだろう。

そう考えたとき、不意に声が聞こえた。

『おいで』

女の声だった。

『おいで、坊や。こっちへおいで』

どこか懐かしい感じの声に、子どもは声のする方へ顔を向けようとした。

その時。

『だめ。そちらを見てはいけない』

先ほどとは違う、どこか澄んだ女の子の声が子どもの耳を打った。  
『戻っていらつしやい』

その声を耳にした時、子どもは白い世界から現実へと戻ってきた。

ゆっくりと目を開けると、囲炉裏が見えた。

頭を動かし、顔を上げると、凧が横に座っていることに気付いた。  
「おはよう。凧」

一緒に暮らし始めた最初の日。凧に様をつけて呼んだら嫌がられた。凧と呼び捨てにしろと言われた時は戸惑ったが、今ではもう慣れてしまった呼び方だ。

「おう。目を覚ましたか」

凧とは違う声を聞いて、子どもは飛び上がるようにして起き上がり、凧の背にその身を隠した。

「怖がられているぞ、剛毅」

どこかおかしそうに、凧が言う。

凧よりもずっと大きくて、怖い顔をした大人が、凧たちの前に座っていた。

「なんだい。一度会っているだろうに」

そう言われて、子どもは記憶をたどった。

そうか。分かった。

「今日は仮面付けていないの？」

子どもはそう尋ねた。

「お、分かったか」

言われて、頷いた。凧と初めて会った日。凧の隣にいた大男が、この人物だと気づいたのである。

子どもは恐る恐る凧の隣に腰を下ろした。

大男は、人の良い笑みを浮かべる。

「俺は、剛毅ってんだ。凧の奴、おまえに名を聞いていなかったらしいな。おまえ、名は何と言う」

聞かれて子どもは首を傾げた。

「名はないです」

「何だって？」

素っ頓狂な声を上げた剛毅に驚いて、子どもが身体を震わせる。

凧が綺麗な顔を顰めて煩いと窘めた。

「僕には名前ないです。僕は忌み子だから。死んでいたはずの子に名前はいらないうって」

凧と剛毅は黙ってしまった。何かまずいことを言ったのだろうか。当たり前のことなのに。

子どもが少し不安になる程の間を置いて、剛毅が口を開いた。

「そうか。名はないのか」

「うん」

頷く子どもから目を離し、剛毅は凧に目を止めた。

「凧よ。おまえつけてやれや。この子に名前」

「は？」

「なあ、名前欲しいだろう」

聞かれて、子どもは躊躇いながら頷いた。

「凧に付けてもらいたいよな」

有無を言わせぬ声音で言われ、子どもは凧を横眼でそつと見てから、はつきりと頷いた。

「つけてくれるの？」

袖を引いて、凧を見上げれば、綺麗な顔に苦笑を滲ませた凧が軽く頷く。

子どもは笑みを浮かべた。

「いいの？ 僕名前つけてもらっていいの」

「ああ、考えとくよ」

なぜか一度溜息をついて、剛毅を睨んだ後。凧はそんな風に言った。

## 第七章 責任

子どもは凧の大きな草履をはいて庭に出ていた。剛毅に庭で遊ぶと誘われたのである。

凧はといえば、剛毅の持ってきた土産を整理していた。

剛毅が土産と称して持ってきた物は、ほとんどが子ども用の着物や食器だった。気がきかない凧の変わりに持ってきてやったと剛毅は威張っていた。

子どもには意味がよく分からなかったが、凧は少し恥ずかしそうにしていた。

凧が表情を変えるのは珍しい。

子どもはふと思いいたって、草笛の吹き方を教えてやると言って適した草を探している剛毅に声をかけた。

「ねえ、おじさん」

「おい待て。誰がおじさんだ。剛毅だ、剛毅。そうだな、おまえは兄ちゃんと呼べ」

「……兄ちゃん」

躊躇いながら呼ぶと、剛毅は精悍な顔に人の良い笑みを見せた。  
「何だ」

子どもはここ数日、疑問に思っていた事を聞いた。

「ねえ。どうして凧は笑わないの？」

そう、ここ数日一緒に寝起きしているが、凧が笑っているところを見たことがなかった。

苦笑いは良くしているが、表情を崩すことじたいがあまりないのである。

剛毅は草を捜す手を止め、なぜか庭の中にあつた切り株に腰を下ろした。子どもを抱き上げ膝に乗せる。

「そうだなあ。凧は、笑い方を忘れてしまったのだろうな。色々あったからな」

子どもは近くなった剛毅の顔を見上げ、良く分らないと言った。

「凧は、親に捨てられた子だ。人売りって知っているか？」

子どもは素直に頷いた。

「うん。婆が悪さしたら人売りに売っちゃうよって言っていたよ。人を売ったり買ったりする人たちのことでしょう。売られたらとっても怖い目に遭うのだって婆が言っていたよ」

剛毅は子どもに、頷き返した。

「そうだ。凧は、人売りに売られた子どもだった。売られた場所から逃げ出すまで、いっぱい傷ついて、いっぱい辛い目に遭ってきたのだろう。だから、笑い方を忘れちゃったのさ」

子どもは口元に手を当てて、何かを考えるそぶりを見せた。

剛毅は子どもが口を開くのを待つように、黙ったままだ。

「そうか。なら、思い出せば良いのだね」

剛毅は良い事を思いついたように声を上げた子どもに、尋ねた。

「何を？」

「笑い方」

子どもの言葉に、剛毅は違いねえと、盛大に笑い声をたてた。

夜半。

半日庭で遊んでもらい、すっかり剛毅に懐いた子どもは、今はもう床についている。

凧は、草履を編みながら子どもにそつと視線を送った。

厄介なことになった。

自分が人に名をつけることになるとは。

そんなこと、一生ないと思っていた。ずっと一人で生きて行くつもりだったから。

名は一生その人についていくもの。下手な名はつけられぬではないか。

それに、名をつけると情が湧くと聞く。

子どもとは、あくまで妖魔を倒すまでの関係だ。

妖魔の印を消すことができれば、しかるべき家に養子に出せばよいと考えていた。

「剛毅の奴、面倒くさいことを言いやがって」

凧は溜息をついた。剛毅の顔を思い出すと、腹が立ち、編んでいる縄を強く締めあげた。

草履を編み終わり、凧は草履を持ってそっと立ちあがった。

眠っている子どもの横に座ると、子どもの頭の脇に、そっと草履を置いた。

子どもに履かせる草履を作っていたのである。

今日、剛毅と子どもが庭で遊ぶ段になって、子どもの履物がないことに気付いた。

今日一日は凧の草履を履かせたが、いつまでもそういう訳にはいくまい。

凧はあくびをかみ殺すと、子どもの隣にある寢床へもぐりこんだ。

「ごうごうと、大きな音が凧の耳に届いた。家の周りに生えている

木々が大きく揺れる音が煩い。

「どうやら、風が強いらしい。

眠りに落ちかけながらそう思った時である。

凧は急に身体を揺さぶられ、目を開いた。

「どうした」

身体を揺さぶったのは子どもだろうと見当をつけ、声をかけると、案の定子どもの声が頭の上から降ってきた。

「風。変な音がする。怖いのが来たのかな」

風は半身を起こし、夜目に慣れてきた目で子どもに視線をやった。

「大丈夫だ。風の音だから」

「でも、ごうごうって吠えているよ。ざわざわって音もするよ」

「いや、だから風の音だって」

「でも、風は鳴かないでしょう」

風の夜着を掴んで訴える子どもの声は真剣だ。

説明するのが面倒臭い。

風はすつと目を閉じた。

一応、辺りの気配を探ってみようと思ったのだ。やはり、妖魔や物の怪の気配はない。

がたがたと、木戸が鳴った。

外はよほど強く風が吹いているらしい。

不意に、子どもが風に抱きついた。

そこで風はようやく悟った。

「なんだ、怖いのか」

「だって、ごうごう、がたがた言うよ。前のお家では聞こえなかったもん」

地下だったからだろう。

そう思ったが、口にはださなかった。

明日も早い。

風は少し面倒臭く思いながら、腰に巻きついている子どもの手を取った。

「しょうがない。一緒に寝るか」

夜目に慣れた目に映る子どもの顔が、不思議そうな表情に変わった。

「一緒に寝てやるよ。そうしたら怖くないだろう」

風は少し身体をずらし、自分の寝床に子どもを入れた。

抱きよせるように子どもの体の上に片腕をまわす。子どもの温かな体温が伝わってきた。

「どうしても、怖かったら、俺の名を呼べ。俺が必ず助けてやるから」

そう言うと、子どもは嬉しそうな笑顔を見せた。

風の音は相変わらずうるさかったが、凧も子どもも、いつの間にか深い眠りに落ちていた。

参内した凧は、早々に書物蔵へとやって来た。

たくさん蔵の中から、いくつかを選び出し、それに目を通し始める。

どれくらい時が経ったか、しばらくして凧に声がかかった。

「凧、こんな所にいたのか」

「またおまえか」

「ごあいさつだねえ」

剛毅は言いながら、書物蔵から持ち出していたのであろう。蔵書を棚へ戻している。

「水妖のことも調べていたか」

「ああ」

凧は言葉少なに答えた。

先日の妖魔は水妖だとあたりをつけていた。水の属性を持つ妖魔だが、一つ気になることがあったのだ。

剛毅が使った呪術『炎華』

これは火の属性の札術である。

水属性の妖魔に火の呪術が効いたことが腑に落ちなかったのだ。

火は水に弱い。その割にあの水妖は、火の術にかなりの痛手を受けていたように見えた。

「剛毅、あの時なぜ炎華を使った？」

尋ねると、剛毅は凧の横に座り答える。

「あの水妖にか？ 何故と言われてもなあ。あの時は、炎の札しか

持っていなかったからな」

凧は、目を細めて呆れた顔を剛毅に向けた。

仮面で顔半分を覆っているの、どれほど相手に伝わっているかは謎だが。

札術を使う者は、少なくとも一枚ずつ、木火土金水の属性を持つ札を所持しているのが普通だ。それを、火属性の札だけしか持っていなかったとは。

剛毅は、頭を掻きながら凧の横へ座った。

「それに、あの妖魔の触手のようなもの。なんとなく燃えそうに見えるなかったか。木の根のように俺には見えた」

「根か……」

木の属性であるならば、火に弱いことは納得できる。だが、あの妖魔は水の中から出てきた。

そのため、水妖だと思っていたのだが。

そもそも考え方が間違っていたのか？

水妖ではなく、木属性の妖魔だとしたら。

「剛毅。あの時、あの沼に何か浮かんでいなかったか」

ふと思いついて、凧は尋ねた。

剛毅は凧の読んでいた本を捲っていた手をとめて、仮面の奥から凧を見る。

「死体だろ」

嫌なことを思い出させるなど言った剛毅に、そうではないと凧は声を荒げた。

「そうではなくて、もっと他の何か……」

仮面の上から眉間辺りに手をあてて、思いだそうとする。

そんな凧の横で剛毅が声を上げた。

「ああ、蓮じゃないか」

「蓮？」

眉間辺りに置いていた手を下ろして、剛毅を見つめる。

「だが、翌日封印しに行った時は。蓮なんてなかっただろう」

「そうだったか？　そういえば。そうだったな」

剛毅の声が真剣味をおびた。

剛毅の記憶が確かならば、沼を封じる前にはあった蓮が、沼を封じた後、沼から消えたことになる。

「すぐに、確認をとる」

剛毅が立ち上がり、書物蔵を出て行った。

板垣に張られた結界を通りすぎると、庭に出る。

書物蔵で妖魔をおびき出す方法を探っていて、帰りがいつもより遅くなってしまった。

もう大分日が傾いている。あちらこちらが夕陽に赤く染まっていた。

腹をすかせているだろうな。

そう思っ、顔を上げた時だった。

庭に、倒れている子どもを見つけた。

昨日の夜、作ってやった草履が片方脱げている。

慌てて駆け寄って、凧は子どもを抱き起こした。

「おい、どうした。おい」

頬を軽く叩くが、反応がない。腕を取ってみると、腕にまかれていた札からはみ出るように、黒い痣が広がっていた。

妖魔の力が強まっている。

「くそっ」

凧は吐き捨て、子どもを抱き上げると、家の中へ入っていった。

子どもを寢床へ入れた時。

ゆつくりと、子どもの臉が持ち上がった。

「凧？」

「ああ。大丈夫か」

「うん」

答えて、子どもは半身を起した。その身体がまた傾ぐのを見て、  
凧は慌ててその身を支えた。

「でも、眠いよ。凧」

「ああ。疲れたか？」

「分からない」

子どもは力なく首を横に振った。

「ねえ、凧。空が赤いね。ずっと聞こうと思っていたの。なんで、  
赤いの？」

虚ろな子どもの目が、窓から覗く夕焼け空を映し出している。

「日暮れだからな。おてんとうさまが沈む時は、ああやって空が赤  
く光る」

「ふうん。綺麗だねえ」

子どもは口元に笑みを浮かべる。そして、はあ、と息をついたか  
と思うと、身体から力が抜けた。

凧は瞬間慌てたが、子どもの胸が上下しているのを見て、ただ眠  
ったのだと気づいた。

少し安堵しながらも、妖魔の力が確実に子どもを衰弱させている  
ことを悟っていた。

## 第八章 正体

神殿の奥。姫神子の御前に凧はいた。

夜半過ぎ、火急の用があると、姫神子から呼びだされたのである。

「凧よ。もう、あの札の効力が落ちてきていることに気づいてますね」

凧は頷いた。御簾越しからかかる声は、凧が拾われた七つの頃から変わらぬ、小さな女子の声だ。

「先日、あの子に夢で会いましたよ。可愛らしい子。妖魔はあの子に干渉を始めています。近いうち、接触があるでしょう」

姫神子の言葉に、凧は膝に乗せた手を強く握った。

「妖魔はあの子の気を吸い、着実に力をつけています。もう間もなく、あの子をおびき寄せ、あの子を喰らう算段を立てているはず」

「どうしてあいつばかり……」

思わず、声が漏れてしまった。

どうしてあいつばかり、辛い思いをしなければならないのかと。

「凧。あの子を守るのは、今はおまえだけ。あの子は、私と似た力を持っています。それだけに、妖魔の手に渡す訳にはいきません」  
「神子の力があると仰せですか」

凧は驚きに声を上げた。

「近いと申したでしょう。あの子は妖かし者を視る力に長けた子のです。ただでさえその様な子は狙われやすいのに。忌み子として育てられたが故、邪気も纏っている。余計に妖魔にとっては餌としての魅力が増すでしょう、印をつけて欲するほどに。妖魔にとっては、力をつけるに適した餌ですからね」

凧は言葉がでなかった。

あの小さな子どもは、生まれてこの方、幸せだったことがあるのだろうか。忌み子と呼ばれ、村人だけでなく、実の親からも忌み嫌われ。生贄にまでされそうになった。

「凧、今はそなたしかおらぬ。あの子を救うも失うもおまえ次第。妖魔が接触してきた時が機です。しばらくは出仕を控え、子どもについていなさい。そして、必ず、妖魔を滅せよ」  
「御意」

凧は姫神子が御簾の向こうからいなくなるまで、頭を下げ続けた。

術力を使い、凧は宮から住まう家へ帰ってきた。仮面を取り、脱いだ外套とつしよに壁にかけた。

寢床を見ると、出て行く前と変わらず子どもは寢息を立てていた。  
「早かったな」

突如声がかけられた。凧はそちらに目を向ける。

「すまん。剛毅。留守番などさせて」

「気持ち悪いな。おまえがそんな殊勝なことを言つと」

「失礼な」

凧は、姫神子からの使いとしてやって来た剛毅を留守番役にして、姫神子に謁見しに行ったのである。

今の状態の子どもを、このまま一人置いていく気にならなかったのだ。

「凧よ。昼間の件。確認が取れたぞ。やはりあの沼にはもともと蓮が咲いていたらしい。だが、妖魔の事件があった後、蓮は見事に消えてなくなったそうだ」

その言葉を聞いて、凧の考えは確信に変わった。

「あれは水妖じゃなく、蓮の妖かしか」

「炎華が効いていたし、まず間違いなكارう」

剛毅が、頷く。

「書物の中に、蓮の妖しについて書かれたものがあつた。昔、東の村にて仮面呪術師が封じたであつた」

「村の者がその封印を解いちまつたという訳か」

苦々しげに剛毅が呟く。

「蓮の妖魔は。木の属性でありながら、水から離れられぬ。その代わり、水を伝い移動することができると書物にはあった」

「村の封印は、蓮の妖魔が移動できぬようにするためのものだった可能性が高いな」

凧の言葉に、剛毅が自身の考えを述べた。

凧も同じ見解だ。

囲炉裏にくべた薪が音を立てて崩れた。火がはぜ、凧らの影が大きく揺れる。

「とにかく、奴が現れてくれんことには、対処のしようがないな」

剛毅の言葉を聞き、凧は子どもに視線を向けた。

「奴が現れるまでに、こいつの身体が持つかどうか」

凧は寝ているこどもの傍らに行くと、そつと子どもの額に手を当てた。

「おまえが、人の心配をするようになるとはなあ」

感慨深げな声が聞こえ、凧は剛毅を睨んだ。

「人を冷血漢のように言うな」

「俺の知るおまえは似たようなものだっただよ」

剛毅の言葉に、凧は顔を背けた。

確かに、非情を常としていた。帝や姫神子の御ためとあれば、人を呪い殺すことに躊躇いはなかったし、他人に情というものを余り持てずにいた。

それなのに。

自分と似た、否、それ以上に辛い経験をしているのであろうこの子を見てみると、どうにも調子が狂う。

凧は子どもの額にかかった髪を横にすぎ、ただ子どもの血の氣のない寝顔を見つめた。

「なあ、剛毅よ」

「何だ」

「こいつは、なぜ笑えるのだろう」

剛毅は、風をじつと見つめた。風は、子どもの髪をすきながら言葉が続ける。

「忌み子として育てられて、辛い思いをしてきただろうに。俺のように世を憎んだり、荒んだりせず、飯が美味いと言っては笑い、夕陽が綺麗だといって笑う。このような状況の中で、泣きもしない。なぜ、そんなことができるのだろうな」

剛毅はしばらく黙っていたが、がしがしと頭を掻くと、口を開いた。

「さあな。ただ、楽しいだけなのかもしれぬな。今の生活が」

「楽しい？ 妖魔に狙われている今の状況が？」

理解できず剛毅を見れば、剛毅は至極真面目な表情をしていた。

「生まれてこの方、ほとんど地下で暮らしていたのだろう。見る物すべてがこいつにとっちゃ珍しくて、面白い物なのかもしれん」

「そうか。そうだと良いな」

風はもう一度子どもにも視線を落とし、寝息をたてている子どものあどけない顔を眺めた。

また、白い世界の水際に子どもは立っていた。

「坊や、おいで」

懐かしい声が聞こえる。

どこか温かく、そして、なぜか切なくなる声。

「誰？ どこにいるの」

「ここよ。ここよ」

子どもは声のする方へ顔を巡らせた。

水面に紅色の花が咲いている。

その上に、女が一人立っているのが子どもの目に入った。

その人を、子どもは知っている気がした。

「かかさま  
母様？」

子どもは、一步前へ進もうとした。

その時、誰かが子どもの手を捉えた。

振り返ると、とても可愛らしい顔をした女の子が、子どもの手を引いていた。

『あっちへ行つてはだめ』

『でも、母様が呼んでいるの』

子どもは女の子の手を振り払った。

そうすると、女の子の身体が薄く透けはじめた。

『うわあ』

『怖がらないで。あの人はあなたのお母上ではないわ。良いわね。絶対に、絶対に呼びかけに答えてはだめ』

女の子はその言葉を残し、消え去って行った。

「おい、おい。大丈夫か？」

声が聞こえ、子どもはうつすらと瞼を開いた。

凧の綺麗な顔が目映る。乱れた呼吸が少し落ち着くのを感じた。

「おまえ、うなされていたぞ」

心配そうに覗きこまれ、こどもは口を開いた。

「凧。変な夢を見たよ」

起き上がろうとしてできなかった子どもを、凧は抱き上げて膝に乗せた。

「どんな夢だった？」

「僕はね、白い所にいてね。水があるの。水の上にはね。綺麗なお花が咲いていてね。その近くに母様がいるの」

背後にある凧の顔を振り仰ぎ、子どもは続けた。

「でもね、女の子にね、母様のところに言っちゃだめって言われるの」

「そうか」

「うん。そしたらね、凧の声が聞こえてね。目が覚めた」

子どもは疲れを感じて、凧に身を持たせかけた。

「その女の子。姫神子様かもしれねえな」

凧とは違う声に驚いて、体を固くした子どもに、凧が言う。

「大丈夫。剛毅だよ」

「なんだ。兄ちゃんか」

兄ちゃん呼ばれた剛毅は、子どもと凧の近くまで来ると、子どもの頬に手をやった。

「腹、減ってないか？ 何にも食べずに眠っていたのだろう」

「うん。でも、お腹すかないよ。ねえ、それより、今日は泊って行くでしょう兄ちゃん」

「ああ、夜も遅いからな」

「良かった。また後で遊ぼうね」

微笑んで、子どもは瞼をすつと下ろした。

眠気がまた襲って来たらしい。

剛毅が溜息をついた。

「随分弱っているな」

「ああ。まずいな」

凧は剛毅と顔を見合わせた後、そつと子どもの寝顔に視線を落とした。

丑三つ時。人も虫も寝静まるこの時刻。

子どもの耳に、声が届いた。

『おいで、おいで』

母様が呼んでいる。

また白い世界に来ていた。

いつもと同じ水際。紅色の花が浮いている水の上に、女の姿がある。

『坊や。私の坊や』

切なく懐かしい声が子どもを誘う。

憶えているはずはないのに、母と分かるその声。

『坊や、寂しかったでしょう。悲しかったでしょう』

子どもには、水面に立ち手招きしている女が、自分の母なのだと  
なぜか分かった。

懐かしく切ない、この思い。

『母のところへおいで。もう寂しい思いはしなくて良いのです』  
本当に？

子どもは、じつと目を細め手招きする女を見つめた。

『坊や。坊やはもう一人ではないのです。悲しい思いも、寂しい思  
いもしなくて良い所へ、母が連れて行ってあげましょう。さあ、母  
のもとへいらつしやい』

本当だろうか。

本当に、もう一人でいなくて良い？

悲しい思いも、寂しい思いもしなくていいの？

『さあ、いらつしやい』

手を差し伸べる女に、子どもは頷いた。

『はい、母様』

呼びかけに答えてはいけない。

そう女の子に言われていたのに。

子どもは返事をしてしまっていた。

寢床からゆっくりと、子どもは起き上がった。

うつすらと開いた眼は虚ろで、何も映していないかのようにだった。  
子どもはゆっくりとした足取りで、木戸を開け草履も履かず庭へ  
出た。

闇夜に浮かぶ月だけが、その姿を見つめていた。

## 第九章 夢と現実

嫌な気配を感じて、凧は目を覚ました。

遠くで物音が聞こえた。凧は起き上がり、横で寝ていた剛毅に目を向けた。

剛毅も先ほどの気配を察したのだろう。すでに体を起こしていた。

「おい、凧」

「ああ。結界が破れた」

凧はさつと視線を走らせ、闇に慣れてきた目で子どもの姿を捜す。いない。

どこにも。

何故、気づかなかった。

「やられた」

そう呟くと、凧は剛毅と共に家を飛び出した。

板垣の木戸が開いている。

子どもが自ら外へ出て行ったのだろう。

一体どこへ。

凧はそつと目の上に掌をかざした。

すると、夜闇に沈む山中の暗がりや昼日中ほどではないが、常よりも鮮明に見えた。

術力を使用したのである。

凧と剛毅は山の中をひた駆けた。常人ではありえぬ速さで。

子どもの足で、そう遠くへは行くまい。

凧と剛毅は子どもの気配を必死で辿った。

だが、気配が辺りに散らばる瘴気に紛れ、分かり辛くなっている。凧の胸に焦りが生じた。

子どもは、常ではありえぬ速さで、山の中を歩いていた。木の根が蔓延る山中。

草履を履いていない足は草や木の根で傷つき、血が流れているが、子どもは痛がるそぶりも見せず、前へ前へと進んでいった。

しばらくすると、木々の途切れた場所にでた。夜空に浮かぶ月がその場所を照らしだしている。

そこには、子どもの住んでいた村と似たような沼があった。紅色の蓮の花が、美しく咲いている。

子どもは、沼へ向かって行く。

子どもの目は相変わらず虚ろで、何も映していないようだった。沼の中から、ゆっくりと触手のようなものが現れた。

それすらも気づかぬ様子で、さらに子どもは足を沼へ近づける。

触手は、一本、二本、三本と増えて行き、一気に子どもへ触れようとした。

刹那。

子ども腕が動いた。

札の貼つてある腕が。

子どもの意思ではない。

腕に貼つてあった姫神子の札が、意思をもったように動き、腕を持ち上げたのだ。

札は腕から剥がれ、子どもと触手の間へ飛びだした。

まるで盾のように、子どもの腕にまかれていた札が、触手を阻んだ。

同時に、青白い光を放つ。

子どもへと伸びてきた触手が、慌てたように子どもから遠ざかる。

そして、こどもの目に正気の光が戻った。

山中に強い風が起こった。

その瞬間、木々の間から青白い光が洩れてきたのを、確かに目にした。

そして、子どもの叫び声を聞いた。

すさまじい程の妖気が辺りを覆い始めている。

「あっちだ」

凧は剛毅に声をかけ、木々の間をすり抜けながら、およそ常人では出せぬ速度で、山道を駆け抜けた。

子どもの姿を発見する。

木々の隙間から見える沼から、東の村で見たものと同じ触手が飛び出し、今にも子どもを捉えようとしていた。

妖魔は怒り狂ったような声を上げている。

凧は駆けながら、両の手を打った。

その手に息を吹きかけると、掌から刀を引き抜く。

「凧、凧、凧い！」

子どもが頭を抱えて、しゃがみこんだ。

「凧い。凧い」

自分の名を叫び続ける声が耳に届く。

凧は、間一髪子どもの前に躍り出た。

迫りくる触手を一閃のもとに切り捨てる。

落ちた触手が蠢き、地上でのたうちまわった。

切られた触手の先端が、即座にもとの形に再生する。

「凧、避ける」

不意に声が聞こえて、凧は考えるよりも先に身体が動いた。

子どもを抱え、左に跳躍する。

先ほどまで凧と子どもが居た場所に、音を立てて触手が突き刺さる。そこへ、剛毅の呪術、炎華の炎が飛んできた。

燃える触手。妖魔の悲鳴が辺りに轟く。

「凧い。怖いよ」

「妖魔の声が聞こえるのか」

凧の問いに、子どもが頷く。

呪術師でもない子どもに、妖魔の音が聞こえたことに少なからず驚いたが、今はそんな場合ではなかった。

触手は次から次へと沼から這い出てくる。

「凧っ」

悲鳴のような声をあげ、子どもが凧の着物を掴む。

怯えたように、凧を呼ぶ子どもに、凧は襲い来る触手を避け、あるいは刀で切り払いながら声をかける。

「大丈夫だ。心配するな」

凧は子どもを片腕に抱え直し、跳躍する。

触手に炎の術で応戦している剛毅を目の端に捉え、凧は叫んだ。

「剛毅」

凧は力任せに、子どもを放り投げた。

子どもの悲鳴が遠ざかって行く。

驚いたような剛毅の顔を一瞬捉え、すぐに凧は妖魔へと目を向けた。

「あつぶねえな。大丈夫か」

木の幹にぶつかる寸前に、子どもの身体を捕まえて、剛毅は沼から遠ざかるように後退した。

そして、懷から札を取り出すと、呪文を唱える。

「炎よ、その姿を現せ。盾となり、我が身を守れ」

「ごっつ、と大きな音を立てて、剛毅と子どもの周囲を囲むように真っ赤な炎が噴きあがった。

触手が炎の壁に阻まれて、二人に近づくことができない。

剛毅の頭の中に、妖魔の怒り狂う声が響く。

『おのれ、人間ども。許さぬ。許さぬぞ』

炎の壁の先に、触手を切り捨てながら沼へと進んでいく風の姿が目映る。

「風の野郎。子ども投げるなら投げると言え。馬鹿者が」

吐き捨てるような剛毅の声を耳にしたのか、片腕に抱いていた子どもが、剛毅を振り仰いだ。

「兄ちゃん？」

「おう。もう大丈夫だ」

剛毅は子どもをゆっくりと地に下ろす。

「とりあえず、ここにいれば安心だ。奴はこっちは入ってこれねえ。いいか、この炎の壁の外へは出るなよ」

子どもは頷いた。子どもの身体が震えている。よほど怖い思いをしたのだろう。

「ねえ、風は？ どうしてこっちにこないの」

子どもはじつと炎の障壁をすかし見る。風の後ろ姿が、沼へ入って行くのを見て、声を上げた。

「風、風、風い」

「おいこら、待て」

風を追って、炎の障壁を突き抜けようとした子どもの襟を、剛毅は慌てて掴んだ。

それでも必死に、前へ行こうとする子どもを力ずくで引き寄せ、腕に抱きとめる。

「いや、離して。風が行っちゃう。風、風い」

暴れる子どもを剛毅はより一層強く抱きしめた。

## 第十章 爆発

子どもを剛毅にまかせ、凧はひたすら沼を目指した。

怒り狂った妖魔の攻撃は凄まじいものであったが、凧はあちこち傷を作りながらも、沼へ向かってひた走った。

沼の中にいるはずの妖魔の本体を攻撃するためである。

いくら、触手を攻撃しても、妖魔にはさほどの痛手を与えることができぬからだ。

本体を攻撃する。

凧の頭の中には今、それしかなかった。

不意に、凧は足をすくわれた。

触手が足首に絡みつき、凧の身体を持ち上げたのだ。

一気に凧の身体にいくつもの触手がまとわりつき、凧を締め上げた。

思わず呻いたと同時に、凧は沼の中へと引きずりこまれた。

「兄ちゃん、助けてよ。凧が、凧が死んじゃう」

子どもは、剛毅の着物を掴んで揺さぶる。

「ねえ、凧を助けて」

必死の形相で叫ぶ子ども。

だが、剛毅は首を横に振る。

「駄目だ。俺はここを動けん」

「どうして？」

「俺はおまえを守ると凧と約束した。俺が動くと結界が解ける」

「でも、凧が」

また、凧の方へ走りだそうとする小さな身体を抱きとめながら、剛毅は言った。

「凧は大丈夫だ。辛いだろぅがここで待て」  
子どもへの言葉であったが、それは剛毅自身。自分に言い聞かせているようでもあった。

沼の中に引きずり込まれた凧は、水中で妖魔の姿を見た。  
思っていたとおり、触手はこの妖魔の根の部分だったようだ。  
大きな蓮の花が沼の中に沈んでいた。

その蓮の花の部分が、真つ二つに割れた様に、大きな穴があいていた。

それは、妖魔の口であった。鋭い歯が覗いている。

凧は、頭の中で、呪文を唱え始めた。

その間も、水中に沈んだ凧は、どんどんと妖魔の方へ引きずられていく。

息が続く間に終わらせなければならぬ。

『破邪刀よ。炎を纏え……』

凧は、まとわりつく触手をから抜け出そうともがく。  
しかし、そのまま凧は妖魔の大きな口の中へ入った。  
触手が凧の身体から離れた瞬間。

刀を妖魔の舌へと突き立てる。

『爆火！』

凧が心の中でそう叫んだ刹那。

刀が光を發した。

凄まじい悲鳴が凧と子どもの頭に響いた。

「伏せろ」

言いながら、剛毅は子どもの頭を地面に押さえつけ、自らも地に

這った。

刹那。

沼の方から大音が轟いた。

爆風が山中の木々をなぎ倒す勢いで、通り過ぎて行く。

炎の障壁が爆風に攫われるように消え、身体に風が叩きつけられた。

一陣の風が通り過ぎ、剛毅はゆつくりと身を起こした。

「い、痛い」

子どもの声が、下から聞こえ、剛毅は慌てたように、子どもの頭の上に置いていた手を退けた。

「悪い。大丈夫か」

剛毅の言葉に子どもは頷き、手について身体を起こす。頬についた土を手で払い落しながら、辺りをせわしく見回す。

「ねえ、凧は？」

剛毅は答えない。

剛毅の目が、自然と沼のある場所へと向かう。

子どもが、ゆつくりと足を一步前へ踏みだし、走り出した。

先ほどまで沼のあった場所に、今、大きな穴があいている。

沼から伸びてきたたくさんの触手も、水面に浮いていた蓮の花も、沼の中にいたはずの妖魔の姿もない。

沼が一つ無くなっていたのだ。

水一滴すら穴の中には残っていなかった。

まるで、最初からそこには何も無かったかのように。

大きな穴がただ、開いていただけのよう。

「ねえ、凧は？ 凧はどこいったの？」

背後から近づいてきた剛毅を振り返って、もう一度聞いた。

剛毅はそれには答えず、沼のあった場所に目を落とした後、子どもの腕を捉えた。

驚いて身体を震わせた子どもの腕を、剛毅はじっと見つめた。

「よかったな。印が消えている」

確かに、子どもの腕にあった黒い痣は消えていた。

安堵の声を発した剛毅の手を振り払い、子どもは辺りに向かって声を張り上げた。

「風、風い。どこ？ どこいったの？」

風がない。

それが、もの凄く怖かった。

また、一人になる。

また、一人になってしまう。

子どもは、先ほどまで水が張っていた大穴の横を沿うように走り出した。

風の名前を大声で叫ぶ。

怖い。

一人になりたくない。

風。

風。

風！

「風い。どこ？ いやだよ。いなくなっちゃいやだ」

子どもの視界が揺らいた。涙が目の縁に溜まる。

「風い。一人にしないで。一人にしないでよお」

涙がこぼれた。

走ったせいで、乱れた息に嗚咽が混じる。

「風い。風っ……あっ」

石に足をひっかけ、子どもが派手に転んだ。

「うええ」

痛みと悲しみと絶望が、子どもを支配した。

子どもは、大声で本格的に泣き出した。

「おい、大丈夫か」

どこか焦ったような声が耳に届く、子どもは反射的に顔を上げた。木々の間から現れた姿を見て、子どもがさらに泣きべそをかく。

「凧」

子どもは立ちあがって、走った。

足が、膝が痛い。

転んだ時に痛めたのだろう。

それでも懸命に走った。

「凧」

子どもは凧の身体に半ば体当たりするように抱きついた。

木々の間から現れた凧は、あちらこちらに擦り傷を作っているが、大きな怪我はなさそうだ。

「無事だったようだな。凧」

そう声をかけたのは剛毅だ。その声には安堵が滲みでている。

凧は、縋りつくように抱きついてきた子どもの背に、腰を少し屈めて手を添えた。

「ああ、奴を滅したはいいが、飛ばされて木の枝に引っかかってなかなか下りられなかった」

間抜けだなと言う剛毅に、煩いと応じて、凧は子どもの頭に片手を置いた。

「何泣いているんだ。転んで痛かったか？」

子どもは凧の袴に顔を埋めたまま、ぶんぶんと首を横に振る。

「なら、怖かったのか？ 妖魔に襲われたのだからな」

その言葉に、さらに子どもは首を横に振った。

「ちっ、違っ。こ、怖かったけど、違っよお」

凧は子どもの肩に手を置いて、その身をゆっくりと引き剥がすと、膝をついた。

はらはらと涙をこぼし続ける子どもに、目線を合わせたのだ。

子どもの両頬に手をあて、親指でそつと子どもの涙をぬぐってやる。

子どもは泣き続けるばかりだ。

「凧い。怖いよお。いなくなっちゃいやだあ、いやだよお」

しゃくりあげながらの子どもの言葉。

凧はどう反応していいか分からず、そつと近くに立つ剛毅に目を向ける。

剛毅は軽く肩をすくめただけだった。

「俺はここにいるだろう。俺が、死んでしまっても思ったのか？」  
尋ねると、子どもはさらに声を上げて泣きだした。

「お、おい」

「死んじやいやだあ。死んじやいやだよ。凧、いなくなっちゃいやだあ」

拳を目にあてて、子どもはとめどなく流れる涙をぬぐう。

「もう一人はいやだあ。いやだよ。一緒にいて、一緒にいてよ、凧い」

凧は必死で訴え続ける子どもを抱きしめた。

細く華奢な身体が、涙で震えている。

「大丈夫。ここにいる。一緒にいる。絶対に、いなくなったりしない。もう一人にはしないから」

そう言って、自分の存在を分からせるように、凧は強く、強く子どもを抱きしめたのだった。

## エピローグ

姫神子のおわす神殿で、剛毅は姫神子に謁見を賜っていた。

蓮の妖魔の一件を報告しに参上したのである。

「まったく。風の奴が、ああも変わるとは。姫神子様。こうなることを予見されていたのですか」

剛毅の問いに、姫神子は答えた。

「さあ、何のことでしょう。私はただ、風に責任を取らせただけのこと。これで、風も自分の命を大切にすることを覚えるでしょう」  
見抜かれてやがる。

剛毅はそつと心の中で呟いた。

風は人との関わりをずっと避けている節があった。

風は昔、帝と姫神子の一行を止め、帝に直接たてつき、不敬をはたらいたとして処刑されそうになったことがある。その時、帝と姫神子の恩情で命を助けられた。

風と仕事を共にする剛毅は、風の自らを省みない行動をよく目にしていた。

それを注意するも、風は「一度死んだ命。それを惜しむつもりはない」と、剛毅の忠告を聞き入れることはなかった。

それがどうだ。あの、変わりようは。

風が子どもを抱きしめている姿を思い出して、剛毅は口元を綻ばせた。

もう一人にはしないと、子どもに誓っていたあの姿。

「何もかも、姫神子様の思い通りという訳か」

姫神子の御前を辞したあと、剛毅はそう独り言つのだった。

その日。凧は子どもと一緒に庭に出て、夕陽を眺めていた。

以前剛毅が座っていた切り株の上に腰を下ろし、子どもを膝の上に乗せた格好だ。

「お日様大きいね」

嬉しそうにはしゃぐ声に、凧は口元に笑みを上らせた。

「ああ。大きいな」

凧の笑みを見た子どもは、より一層嬉しそうな表情をつくる。

「赤くて、綺麗だね。僕ね。夕方のお空大好き」

何もかもを赤く染める夕陽。大きく温かなそれを見ている凧の胸に、ふとあることが思い浮かんだ。

「そうだ。名前」

その言葉に、子どもが凧を振り仰ぐ。

「なあに？」

「おまえの名前。決めた」

凧はゆっくりと片腕を上げると大きな夕陽を指さした。

「おまえの名前は夕だ。夕陽のように、大きく温かな人になるように」

子どもはしばらくきょとんとしていたが、ゆっくりと大きく目を見開いた。

「僕、名前がついたの？」

「そうだ。夕。おまえの名だ。気に入らないか？」

問われて、子どもは大喜ぎで首を横に振る。

「ううん。嬉しい。すっごく嬉しい。僕の名前は夕なんだね」

「ああ。おまえは夕だ」

茜色の空の下。

夕と凧は飽きることなく、いつまでも、夕陽を眺めていた。

## エピローグ（後書き）

ここまでご覧いただき、ありがとうございました。

今回の作品は前書きにも書きました通り、伊那さま主催の『和風小説企画』に参加させていただいた作品になります。

しばらく諸事情により、創作活動を控えておりまして。私ごとですがハビリ的な意味合いを持つ作品となりました。

しばらく書かないと、どうやって書いていけばいいのかとか忘れちゃいますね（汗）いやゝ。精進せねばと思いました。

和風と言えど、ファンタジー、異世界のお話ということで。私が最も苦手とするジャンルに今回挑みました。

もっと、上手く考えていることを表現できればと、執筆中も今も歯がゆく感じております。

読んでくださった皆様に、どのように感じていただけるか。楽しみでもあり、不安でもある。今はそんな気分です。

とても、上手くかけたとは言えない作品ではありますが、皆様に少しでも楽しんでいただけていれば幸いです。

評価感想などなど、おまちしております。

それでは、最後に。

伊那さま。素敵な企画に参加させていただきありがとうございます。

た。

おかげですつと眠っていた世界を世にだすことができました。

『和風小説企画』には、たくさんの作家さまが色んな和風小説を投稿されています。こちらをご覧くださいている皆様、よかつたら私と一緒に、和風企画を楽しんでみてくださいませ。もくじページにHPのリンクを貼っています。

やっぱり私のあとがきは長くなってしまいますね（^^；

それでは。

ここまでご覧いただきありがとうございました。

また、お会いできることを願って。

愛田美月でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5277v/>

---

夕風の庭

2011年8月26日03時25分発行